

R4 地域協働研究 (ステージ I)

R04-I-11 「「婚活」から拓く「混活」まちづくりの実践調査と分析 - 多様性を触発する中で山田町から仕事・移住・結婚施策の事業創出に向かう -」

課題提案者 山田町 (山田町若手職員施策等研究会)

研究代表者 総合政策学部 倉原 宗孝

研究チーム員 大川 修一 (政策企画課)、花崎 和博 (同)、芳賀 大輔 (同)、他11名

(要旨)

山田町では新たな総合計画策定を前にして役場若手有志が中心になり町の今後の施策を学習・議論してきた。結果、取り組みの柱に「仕事づくり」「移住促進」「婚姻率の向上」の3テーマが抽出され、その具体的方法の一つに「婚活」があげられた。ただし単なる婚活ではなく、真の山田町まちづくりの今後の持続展開に向けては、東日本大震災後の復興で形成された様々な交流を活かし育むことが大事だとの認識のもと、本研究においては「混活」(地域内外の多様な人々が混じり合う仕組みとその効果促進)の概念提起のもと幾つかの視点から活動を行った。今年度研究においては高校生に焦点を当てた自主的な地域・政策活動、また町を舞台とテーマにした大学生と行政職員による交流・触発の場を試みた。なお、当初計画においては地域内外・男女・各世代の交流実践のもとその効果・検証を計画していたが、コロナ禍にあり交流の場は限定的になった。しかし今回の経験・成果をもとに更なる持続発展的な活動を狙っている。

1 研究の概要 (背景・目的等)

全国同様に山田町においても少子高齢化・人口減少の流れのなか危機感は強く、特に東日本大震災以降、その打開策を模索し続けている。若手県沿岸の一自治体である山田町は地理的・歴史的にも独自の発展を遂げ現在にあるが、ある意味で旧態的な体質にあり、地縁関係は強く、他者に対して閉鎖的な気質は否めない。一方で、東日本大震災以降、町外からの様々な支援を受け(このことは深く感謝したい)、同時にそのなかで様々な人々の往来や交流も生まれている。

そのなか町では地方創生戦略のもと、まち・ひと・しごとづくりの施策・計画と実現に取り組んでいるが、町内選抜有志による学習会のもと「仕事・移住・結婚」を重要な施策テーマとして掲げられた。そのなかで、特に町民・関係者にも分かりやすく、また(選抜メンバーは若い世代が多かったせい)か夢が広がる結婚への思いは強く「婚活」のテーマが揚がった。一方で安易な婚活とは別に東日本大震災以降にみる地域内外の多様な人々が混じり合い様々な個々の思いや力を編み合うような活動が必要・重要、すなわち「混活」のテーマとイメージが生成された。本研究においては、「婚活」(という全国で行われ分かりやすい取り組み)を動機にしながら「混活」という閉鎖性を打ち破る多様性・開放性のテーマと働きかけを行いながら、これからの山田町のまちづくりに向う方針と方法として実践することが本研究の狙いとなる。

2 研究の内容 (方法・経過等)

本研究の着想動機でもあり、これまでの町内の現状・課題を整理・分析した庁内若手有志による研究会の成果(図1)を今回の活動指標とした。指標「仕事の創出」「移住の促進」「婚姻率の増加」の3テーマが整理され、取り組むべき重要な「調査項目」と「実施方法」を一定程度整理されており、その各内容に

ついては庁内担当部署・研究員がそれぞれ現在も取り組んでいるが、今回はその中から「高校生・大学生の就業・進学」(仕事の創出)、「町の魅力確認」「みんなの生活ケース」(移住の促進)、「出会いの場の調査」(婚姻率の増加)といった内容(図1中の赤枠)に近い情報収集・分析・成果を目的に、地元山田高校生との取り組み、県立大学生による地域体験調査、大学生と庁内職員とのワークショップなどを行った。なお、先のように当初予定していた地域内外・老若といった多様な交流・活動(混活)は今年度は見送ったが、図中の調査課題の進行と並行しながら今後取り組んでいきたい。その持続展開のための動機・基盤が今回の研究活動において整ってきたと考える。

3 山田高校生の思い・アイデアの採集・顕在・具体化

「混活」の重要主体である山田高校生の思いや考えを座談会方式ですくい上げた。創立100周年を迎える伝統ある山田高校だが、進学・就学など現実の課題のもと高校生も様々な思いがあることが分かった。幾つかの項目で記す。

番号	仕事の創出		移住の促進		婚姻率の増加	
	調査項目	実施方法	調査項目	実施方法	調査項目	実施方法
1	・若者が就きたい職業について(アンケート)	アンケート	・町出身者の都市部への進学率調査	インタビュー	・既婚者の調査	アンケート
2	・平均収入額調べ(アンケート)	アンケート	・就きたい職業の希望		・未婚者の結婚願望を含めた調査	アンケート
3	・高校生、大学生の就業・進学調べ(アンケート)	アンケート	・都市部大学出身者の就職先データ	アンケート	・出会いの場の調査	既存資料活用
4	・町出身者の就職状況調査	アンケート	・希望する職種、給料、勤務地の把握	アンケート	・婚活イベントの成功可否調査	インタビュー
5	・求職者の把握	既存資料活用	・地域別の給料比較	既存資料活用	・結婚者の不安調査	アンケート
6	・みんなの生活ケース調査	アンケート	・移住後のイメージ調査	アンケート	・新しい結婚後の(効果的な)生活支援制度の先進地への調査	既存資料活用
7	・山田町の知名度調査(街角インタビュー)	インタビュー	・町の魅力確認	既存資料活用	・子育て世帯への調査	アンケート
8	・他市町村との意識調査(既存資料活用)	アンケート	・町産業の確約(他市町村との比較)	既存資料活用	・先進地の取り組むデータ調査	既存資料活用
9	・貸店舗調べ	アンケート	・通勤、通学時間、距離調査	既存資料活用	・事業実施後の成果調査	インタビュー
10	・3大キャリアの適度エリアマップ、駅-PIの場所調査	インタビュー	・町内事業所に勤務する町外の人調査	アンケート		
11	・移住したい魅力調査	アンケート	・地域との家賃比較	インタビュー		
12	・住みたい魅力調査	アンケート	・物件数の比較、土地相場比較	アンケート		
13	・仕事者の補助金利用状況調査	アンケート	・他とのイベント数の比較	アンケート		
14		インタビュー	・民間主導イベント	インタビュー		
15		インタビュー	・町内在住者の就労状況	既存資料活用		
			・町内業者、企業へのアンケート	アンケート		
			・企業側のニーズ調査	アンケート		
			・テレワークの企業調査	ネット取りまとめ		
			・場所を選ばない職種の把握	ネット取りまとめ		
			・商業施設の把握	ネット取りまとめ		

図1 町内研究会で整理した仕事・移住・婚姻のテーマと段階的な調査プログラム

〈山田高校への入学理由から〉単純に「家が近いから」という理由があるが、通学など交通費に対する経済性、自身の自由な時間を確保しやすいなど冷静な目もある。また「ボート部」の存在は大きいようで今後町の政策としても検討すべき課題と思われる。兄弟・知人からの影響もあり高校の魅力は如何に発信していくか今後問われる。

〈山田高校の魅力〉「海の運動会」を評価する声がある。海岸を持つ本町ならではの魅力でもある。内陸の高校との交流も評価されており今後期待される。

〈今後の課題〉上記の様に評価される点はあるものの、一方で課題として高校の魅力不足、情報不足などの指摘も上がっている。山田中学は洋式トイレだが、高校は和式の状態にある不満の指摘もある。若い世代の指摘が多くが納得する。一定の入学者数を確保し続ける上で、施設整備や情報発信は政策的な課題ともなりそうだ。

様々な思いや考えを持ちながらも山田高校への愛着は強い。100周年の伝統のもと仮に地元を離れる人がいても応援してもらえるような親しみやすい高校が期待されている。

また山田高校生と町教育委員会の協働により津波碑の碑文説明パネルが今年度設置された。現地に足を運び津波碑の状態を確認したり碑文解説する等の調査のもとに出来上がった。山田町の魅力や災害も含めて様々な歴史を高校生（若い世代）が調査活動しながら現代・未来に成果を残すこうした活動も今後の一つの有効なまちづくり手法となる。



役場職員と協力し具体政策課題・現場にも関わっていく山田高校生。

4 大学生による町の魅力体験・評価

町外若者（大学生）の目からみた町の資源評価、同時に混活の一コマとして町役場職員と大学生との交流を行った。双方にとって触発される点が大きかったようだ。

まず大学を会場にして役場職員と大学生との交流のもと町に対する印象、体験してみたい事、知りたいことを出し合った。そのもと山田町を大学生が訪問し各種体験を行った。オランダ島（マリンスポーツ、釣り）、海岸観光スポット、神社、料理など町の各資源と共に、大学生にとっては東日本大震災後の復興整備の様子も印象に残ったようだ。



町職員による大学訪問と学生との交流（写真左）、大学生による山田町訪問と交流（同右）。場所を替えた互いに現地交流も効果的だった。

事前に学生要望を収集し町から体験素材が提案された。山田町には海と山の素材があるが、夏季だったこともあり結果、海を主とした体験が多くなった。



オランダ島マリンスポーツは最も好評だった一つだ。当初海を敬遠していた女子学生も次々に楽しんでいった。その後のバナナボート体験は大絶賛だった。せっかくあるこうした魅力を如何に対外的にアピールするかが提示された。

その地域に人と触れ合いながら食する食べ物も印象が深い。よくある蒸かした芋だが出会ったおばさんが「山田風だよ」と提供してくれた芋を美味しく頂いた。こうした食と人の交流する体験、観光も有効だろう。



釣りを楽しむ学生もいた。普段の趣味の延長のようだが、あえて住まいを離れた別の場所で、観光体験と同時に自身を見つめるといった「内的観光体験」の示唆も有ろう。彼女は一匹も釣れなかったようだが、それでも意義は大きい。



海だけでなく、古い神社仏閣など学生（若者）にとっても興味深いようだ。今回夏季だったが冬季の体験を期待する声が多かった。

5 学生・町職員とのワークショップ

各交流・体験のもと学生と役場職員によるこれからの町の政策・事業提案と共にその優先順位などが検討された。短期間だったが有効な提案が生まれたと思う。その実現に向けて今後も町内外の持続的な研究活動が期待される。



若本(大学生)・町外の視点は町職員にとっても思考を触発するものだった。同時に学生においても多面的学びのある良い関係である。

6 おわりに

お世話になった町内多くの皆様に感謝したい。短い活動だったが交流そのものが有効な成果となった。今回取り組めなかった他の要素との混活を今後仕掛けていきたい。